

SHOW HEY シネマールム

★★★★

パピチャ 未来へのランウェイ (PAPICHA)

2019年/アルジェリア映画 フランス・アルジェリア・ベルギー・カタール製作
配給: クロックワークス/109分

2020 (令和2) 年11月7日鑑賞

シネ・リーブル梅田

Data

監督・脚本: ムニア・メドゥール
出演: リナ・クードリ/シリル・ブ
ティラ/アミラ・イルダ・ド
ウアウダ/ザーラ・マネル・
ドウモンディ/ヤシン・ウイ
シャ/ナディア・カシ/メリ
エム・メジケーン

👁️👁️ みどころ

アルジェリア映画は珍しい。『アルジェの戦い』(66年)はすごい映画だったが、アルジェリアの独立は? 90年代のアルジェリアは?

邦題の『パピチャ』とはナニ? また、ハイクとは? それらを一一つ確認しながら、前半では本作の監督と同世代の趙薇(ヴィッキー・チャオ)が、『So Young~過ぎ去りし青春に捧ぐ~(致我們終將逝去的青春)』(13年)で描いた90年代の中国の青春群像劇とは異質の、アルジェリアの大学における青春群像劇を楽しみたい。

しかし、本作の本筋はあくまで、ファッションショーで未来へのランウェイを切り開こうとするヒロインの生きざま。厳しい女性差別の中、彼女はいかなる頑張りをして・・・?

—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*

■□■ 「パピチャ」とは? 監督は? セザール賞受賞に拍手! ■□■

本作は2019年のアルジェリア映画で、フランス・アルジェリア・ベルギー・カタール製作とされている。また、パンフレットによれば、監督・脚本は、1978年生まれで、ロシア出身、アルジェリア育ちの女性、ムニア・メドゥール。彼女は1990年代のアルジェリア内戦の時に家族とともにフランスに移住し、大学でジャーナリズムを専攻した後、パリで映画製作を学んだそうだ。そんな女性監督の長編第一作となる本作は、第45回セザール賞の新人監督賞と有望若手女優賞を受賞したそうだから拍手! もっとも、アルジェリア国内で全編撮影が行われ、アルジェリア映画として国内でのプレミア上映が2019年9月に予定されていた本作は、突如当局により説明なしに上映が中止されたそうだから大変。それは一体なぜ? それは、本作を鑑賞すれば誰でもすぐにわかるはずだ。他方、本作の邦題は『パピチャ 未来へのランウェイ』だが、「パピチャ」って一体ナニ? 本作の原

題も『PAPICHA』だが、これはパンフレットによると、「愉快で魅力的で常識にとらわれない自由な女性」という意味のアルジェリアのスラングだそうだ。

本作冒頭、大学の寮に住むネジュマ（リナ・クードリ）がルームメイトのワシラ（シリン・ブティラ）とともに寮を抜け出し、郊外のナイトクラブに遊びに行くシークエンスが登場する。タクシーの中でドレスに着替え、大人びたメイクを施す姿を見ていると、まさにこれがパピチャ！さあ、そんなタイトルの、私のはじめて鑑賞するアルジェリア映画の出来は？

■□■アルジェリアの独立は？90年代のアルジェリアは？■□■

西欧列強による植民地支配のトップランナーは大英帝国だった。1947年の8月15日にはインドが独立したが、それがインドとパキスタンという2つの国家に分離しての独立になったのは一体なぜ？その事情は『英国総督 最後の家』（17年）『シネマ 42』（119頁）を観ればよくわかるが、ことほど左様に、植民地だったインドでのイギリス総統の力は大きかった。アフリカや中東地域の植民地支配をめぐるのは、英・仏・独の勢力争いが顕著だったが、アルジェリアを支配していたのはフランス。フランスは1954年にはベトナムを、1956年にはチュニジア、モロッコの独立を認めたものの、石油や天然資源に恵まれているアルジェリアの独立は容易には認めなかった。そのため、1954年以降、8年間に及ぶアルジェリア独立戦争が勃発した。その姿は、ジッロ・ポンテコルヴォ監督の『アルジェの戦い』（66年）で詳しく描かれていた。さらにアルジェリアでは、1990年代に内戦が勃発したが、それは一体なぜ？

本作のパンフレットには①REVIEW「夢や希望を作り出す“革命”の物語」（前田エマ [ファッションモデル]）、②COLUMN「世界に羽ばたくパピチャの誕生」（佐藤久理子 [文化ジャーナリスト]）、③REVIEW「誇り高き闘う女性たち」（金原由佳 [映画ジャーナリスト]）、④COLUMN「スクリーンに映るアルジェリア社会の矛盾と苦悩」（私市正年 [上智大学名誉教授]）があり、それぞれアルジェリアの歴史を解説しているので、これらを参考にしながらアルジェリアの歴史をしっかりと勉強したい。

しかして、本作冒頭に登場するネジュマやワシラたちは、大学の寮で生活しながらフランス語の勉強に励んでいたわけだが、そんな1990年代のアルジェリアは？

■□■本作 vs 『致我們終將逝去的青春』。両者の監督比較■□■

私の大学時代は1960年代後半の1967年からだったが、本作冒頭に登場するネジュマたちの大学時代は1990年代。本作にはネジュマのルームメイトとしてワシラのほか、カヒナ（ザーラ・マネル・ドゥモンディ）たちが登場し、本作のハイライトシーンとして描かれる、ネジュマが企画し実現するファッションショーのモデルになるという青春模様が描かれる。もちろん、イスラム社会では、女はヒジャブの着用が絶対だから、西欧風の肌を露出し、セクシーさを強調したファッションは論外！したがって、寮内でそれを企画していたネジュマたちの部屋に、黒いベールに身を包んだ女たちが乱入してくるシー

クエンスを含め、さまざまな妨害活動が展開されたのは当然だ。寮外に出ることを黙認してくれていた門番のおっさんも最初は良い人かと思っていたが、金の要求だけでなく、いやらしい要求をしてきたから、アレレ・・・。

本作でとりわけ衝撃だったのは、ネジュマがジャーナリストとして働いている姉のリンダ（メリエム・メジケーン）と久しぶりに再会し、母親と共に束の間の家族の団らんを過ごしている時に鳴り響いた銃声。1991年12月から始まったアルジェリア内戦は2002年2月に政府側の勝利で終わったが、アル・カイダ機構による反政府活動はその後も続いた。そんな情勢下、アルジェリアでは西洋文化に親しみ、フランス語をしゃべるリンダのようなエリートたちは、多くの下層階級になっているイスラム教徒たちから敵視されていたわけだ。

そんな本作を観ながら私が思い出し対比していたのは、中国の有名女優で監督業にも進出した趙薇（ヴィッキー・チャオ）の初監督作である『So Young～過ぎ去りし青春に捧ぐ～（致我們終將逝去的青春）』（13年）（『シネマ 34』385頁）。同作は、1967年生まれで、本作のムニア・メドゥール監督と同世代になるヴィッキー・チャオが、1990年代の北京の大学を舞台として作った青春群像劇だが、文化大革命（1966年～1977年）と、1980年代の改革開放政策を経た後の、1990年代の北京の大学生生活に興味深かった。

そんな両作品と両監督を比較してみるのも一興だ。

■□■ハイクとは？あんな布がファッションに？■□■

本作ではそもそも本題の『パピチャ』が何のことかわからないうえ、本作中盤に登場するハイクなるものもさっぱりわからない。パンフレットでは、これは「マグレブ地方（リビア、チュニジア、アルジェリア、モロッコなどの北西アフリカ諸国）のムスリマが着用する伝統的な布。近年、白いハイクはアルジェリアで年配の女性を中心に日常着として着用されている。」と解説されている。ヒジャブとどう違うのか私にはよくわからないが、この際それはどうでもいいことで、本作で興味深いのはネジュマがファッションショーの素材としてハイクの活用を思いつくことだ。要するに一枚の布を様々にデザインし、それだけで1つのショーを構成しようというネジュマのユニークな試みが本作のメインストーリーになるわけだ。

ちなみに、ベトナム映画『サイゴン・クチュール』（17年）は、中国の「チャイナドレス」と同じように有名なベトナムのアオザイを売る有名店に生まれた娘の物語だった（『シネマ 46』250頁）。同作は「タイムスリップもの」の構成をとりながら、最新ファッションを目指すヒロインが、ラストでは伝統的なアオザイの魅力を再認識するという大団円とされていたが、さて、本作でネジュマはハイクをいかに活用していく？私はそのファッションの妙はさっぱりわからないが、あんな布切れがファッションショーの総ての素材になることにビックリ！

■□■男の協力は？恋人は？結婚は？妊娠は？■□■

本作はイスラム教の下で厳しい男女差別に抵抗するネジュマをヒロインとした物語だが、前半には一見、ネジュマの先進性に理解を示すような男、メディ（ヤシン・ウイシャ）が登場するので、それにも少しだけ注目！ネジュマとワシラが、メディとその友人、カリムと知り合ったのはナイトクラブで遊んでいる時だが、帰りのタクシーに逃げられたネジュマとワシラに対して「車で送ってやろう」と誘ってきた男がメディ。その車の中でカリムから住まいを尋ねられたワシラは、「大学の近くだ」と嘘をついたが、それはカリムから「大学寮に住む女子学生は尻軽だ」と言われていたため。その後もワシラはカリムから嫌われないように嘘をつき通してきたが、ある日その嘘がバレてしまうと・・・。

他方、保守的なカリムとは違い進歩的なメディは、ネジュマに対して「アルジェリアを離れて外国で新しい人生を築こう」と誘ったが、ネジュマが「家事をさせるため？」と聞くと、メディは「せっかくチャンスをやったのに」と反発したから、アレレ・・・。要するに、あの当時のアルジェリアの男たちは、いくら進歩的だと言ってもその程度だったわけだ。

そのことは、「妊娠したらしい」と打ち明けた、もうひとりのルームメイトのサミラ（アミラ・イルダ・ドゥアウダ）が「兄に殺される」とおびえたり、現実に住むところがなくなったためネジュマの家に転がり込んでくるサマを見ていると、そこにも、日本以上に厳しいイスラム教下での男女差別がくっきりと！

■□■ショーの成否は？ネジュマの選択は？■□■

本作のハイライトは、ネジュマが寮長のマダム・カミシ（ナディア・カシ）に無理やりねじ込んでやっと承諾を取ったファッションショーのシークエンスになる。と言っても、私にはそのレベルはよくわからないうえ、本作に観るファッションショーの成功ぶりは、それまでのストーリーと比べるとかなり安易で現実離れしている。しかし、それは映画だから大目に見たい。これがそのまま成功すれば、そこからネジュマのサクセスストーリーが始まるが、それはハリウッド映画のシナリオであって、イスラム社会ではそうはいかないはず。そう思っていると、案の定・・・。

本作前半にネジュマたちの部屋に乱入してきたのは黒いパールをつけた女たちだったが、本作のハイライトシーンとなる華やかなファッションショーに乱入してきたのは、何と・・・？なるほど、これがイスラム社会の現実！私たちは、そんなあまりにも厳しい現実をネジュマと共にしっかり確認したい。そして、本作でそんな過酷な体験をしたネジュマが本作のラストに見せる、“ある選択”もしっかり確認したい。

2020（令和2）年11月16日記